

教育の生産性を高めるために (Ⅲ)

学習指導における教師・生徒の相互作用を中心として

学校長 大西 誠一郎

1. 教育をコミュニケーションとしてとらえる考え方は、教育の場の性格を検討する上に、きわめて有効な方法である。教師と生徒とは、相対しつつ互いに情報を伝達し、同調の世界を作りつつあるのである。教師は生徒に対して、知識を伝えようとし、あるいは生徒の中に新しい知識、態度を開発しようとして努力している。

しかして、教師が生徒に「情報を与える」という事態を考え、そのことがなしとげられるためには、どのような条件が必要であろうか。

- (1) 第一には、情報が相手に適合した形で与えられること
- (2) そして第二には、相手がその情報に対して関心をもつこと
- (3) そして最後に、情報の与えられる場面が情報を伝えるに適合した状況であること

さてここで「情報の伝達」とは何を意味するのであろうか。「伝達」という言い方は、1つの知識が一方に流入されることであると考えられやすいが、本来の意味においては、むしろそれは「情報を共通のものにする」と言った方が適当であるかも知れない。

Communication ということばは、ラテン語の Communis, すなわち Common ということばから出ているといわれる。「AがBにコミュニケートする」というのは、AとBとが一つの情報を中心として「同調」することであると説いた方が適当である。

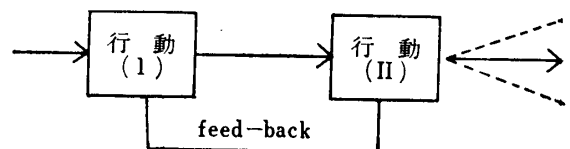
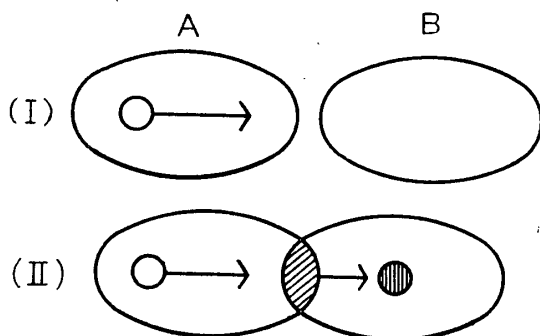
そして、AとBとが情報を中心として同調しようするためには、その情報を送る側にも受ける側にも、その情

報を支える「経験的背景」が重なりあうことが必要である。A、B 2人の人間が、その経験の世界において重なりうる領域を少しも持たないならば、(図、I) Aからの情報はBに受け入れられないであろうし、Bはそのことによってなら新しい世界を開発することもできないであろう。それに反して、AとBとの経験的背景が重なりあうならば(図、II) 両者は同調して、Bの中に新しい世界を開発しようるのである。

2. さてこのコミュニケーションの過程には、Aは相手Bが同調したか否かをたしかめるといことがいつも行なわれる。Aの行動に対して引き起こされるBの反応は、Aが自己の行動に対する反省の材料となり、次の行動への指針となるのである。このような反応として返って来る過程は、feed-backと呼ばれるが、人間相互の交渉の場には重要な役割を果たしている。

ウィナー (Wiener, N.) のことばをかりて言えば「われわれが与えられた一つの型通りにあるものに運動を行なわせようとするとき、その運動の原型と実際に行なわれた運動との差を、また新たな入力として使い、このような制御によってその運動を原型にさらに近づけていくことである。」と説明される。それはわれわれの日常の身体的運動にも見られるのであって、かりに1本の鉛筆を拾いあげるとしよう。そうするためには、われわれは筋肉を働かさなくてはならない。ただその時どのような筋肉がどう伸縮しているかは意識しない。それにもかかわらずわれわれの神経は手先と鉛筆との距離を認知し、瞬間ごとに神経を通じて脳中枢に報告されて次の動作が調整されるのである。

人間対人間の教育の問題も、そこにもっとも原型的な姿を見出すことができる。あるいはまたこれを「循



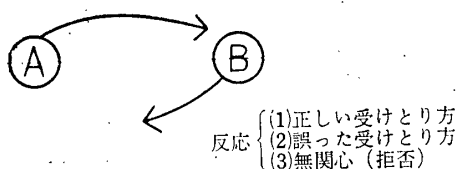
環行動」とも言うことができる。しかしそれは、ただ「循環」するだけではなく、循環しつつ反省を加え、

調整を行なって、行動の改善と進歩とがもたらされるのである。

3. さて、A、B 2人の人間関係において、Aの与えた情報はBに受け入れられるわけであるが、Bがそれをどのように受け入れ、それにどのように同調しえたかということは、Bの反応によって知るほかに方法はない。もちろんその反応は、ことばによるものだけでは限らない。顔色、態度等にもあらわれうるし、距離のへだたっている場合には、文字や電波を媒介することもありうる。反応の手段は何であっても、Bがその情報をどのように受けとめたかを知ることは、われわれにとってきわめて重要なことなのである。

学習の場について考えるならば、反応の型は大きく3つに分けることができる。すなわち、

- (1) 正しい受けとり方
- (2) 誤った受けとり方
- (3) 無関心 (拒否)



もちろん、正しい受けとり方の中にも段階はある。文字どおり十分たしかに受けとめている場合と、やっと正しく受けとめている場合との別はある。誤った受けとり方にしても同様で、具体的にはさまざまな段階の内容を含んでいるが、ここでは一応まとめて考えておく。なお、無関心のほかに「拒否」という態度も考えられるが、ここでは「無関心」の中にふくめておく。

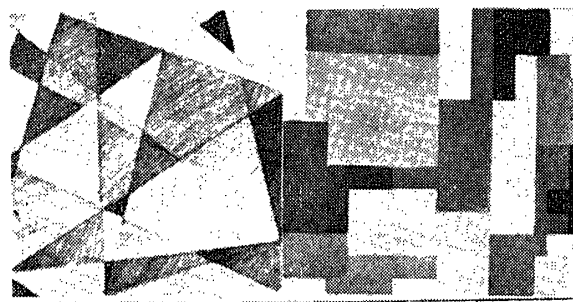
4. 本校が従来研究として来たものは、この(2)の型に属するものであり、「困難点の分析」はそれに関連した問題を中心として扱って来たのである。本年度は、そのような「困難点」や「つまづき」がどのような事態において発生するのか、したがってまたそれをどのように指導すれば正しくかつ確かな知識、態度として受けとめられるかを研究しようとしたのである。しかもそれを、単に教師の立場からだけでなく、あるいはまた生徒の側からだけでなく、いわば教師と生徒との相互作用の過程の中にこの問題解決の鍵を探ろうとしたのである。

次下に美術科の授業によって得られた資料をかかげて、この問題の具体的な展開を考えよう。

美術授業 (中野満男教諭, 中学1年) 「無彩色の配色練習」すなわち、鉛筆や水絵具を使い、濃いところと淡いところの割合を工夫して描かせる指導。まず手本に準じてできあがった作品の中15点を掲示してこれらの作品をある原理によって分類することを教示、学

級全員との話しあいによって進める。この時出て来た生徒の考え方は、次のようである。

- (1) 抽象的なものと実物のある形がもとになっているもの
- (2) 直線的なものと曲線的なもの
- (3) 立体的なものと平面的なもの
- (4) 規則的なものと不規則なもの
- (5) 単純なものと複雑なもの



これらの「原理」は次々に生徒から出されたものであるが、あるものは、生徒の中にかすかに芽生えていたものであり、あるものは、ほとんど意識されない形で存在したものである。しかし、こうして提示されると、生徒はそれを自分の知識体系と対決させつつ、限りなくその可能性を発展させることができるのである。

なお、国語科の授業についても、具体的な資料を得たのであるが、その内容については、稿をわけて詳細に報告したい。(授業過程の分析, 大西, 鈴木)

5. 以上教師・生徒の相互作用についての基本的な考え方と、授業の具体的な内容について述べた。しかし、教師・生徒の相互作用は、1時間内の指導過程においてだけ問題とするのではない。

さらに長期にわたってその反応を検討しつつ指導することを考えている。1単元のあとに行なわれた調査やテストにより、あるいはさらに長期にわたって行なわれた調査や観察などによって、生徒がさまざまな情報をどのように受けとめたかを知るのである。そしてその結果の検討をもとにして次の指導体制を打ち立てて行く。そこに指導を効果的ならしめ、教育の生産性を高める一つの鍵がひそんでいるように思う。

さて、以上のような観点のもとに本校の研究はつけられて来たが、本年度はとくに「基礎教育の研究—学習指導における教師・生徒の相互作用を中心として」の主題のもとに研究協議会を開いた。その内容については別に記述されるけれども、その根本に流れている問題意識は、以上のような構想のもとになされたのである。もちろん、本校の研究のすべてが、文字どおりそれに統一されえたというわけには行かない。あるものは「教師・生徒の相互作用を中心として」という

主題に無理に関連づけたと見られるものもあろう。しかしそれは、教科の特質にもよるし、また、われわれの研究体制のあまきにも基因しているかも知れない。それにもかかわらず、われわれは、なんとかして上述の

ような観点から問題を追求しようと努力を重ねたのである。本年度の紀要は、その意味において、研究協議会を中心として発展したものをまとめたものである。広く同学の士の御批判が得られるならば幸である。
